

## 近世甲府城下町における都市構造の変容過程

——人口推移を中心に——

土 田 良 一

はじめに

近世城下町人口そのものの研究はもちろん、近世城下町構造に関する多くの研究蓄積の中でも、人口面からのアプローチは少なく、その研究が強く叫ばれているといつてよいだろう。

農村人口の研究に精力的な分析をこころみてきた歴史人口学の立場(1)からはもちろん、歴史学からは、都市騷擾の性格をめぐって、住民の存在形態を中心に都市内部の地域社会構造の解明や、都市と農村との関係が問題とされる時(2)、人口の動向に関する研究は必要不可欠である。また、歴史地理学においても、城下町内部の地域構造や城下と藩領とのかわり方を主要な研究課題としており(3)、城下町人口の推移構成・動態からの実証的研究の積み重ねが必要とされる。その意味で、彦根城下町内部の人口構成や動態に正面からとりくんだ矢守一彦(4)や、上田城下町の人口動態に関する深井甚三の研究(5)は注目しなければならない。また、大阪における下人別家設立と住民の都市内部循環、町統地(6)の性格をめぐる松本四郎の研究(7)は今後の研究課題を提示していると思われる。

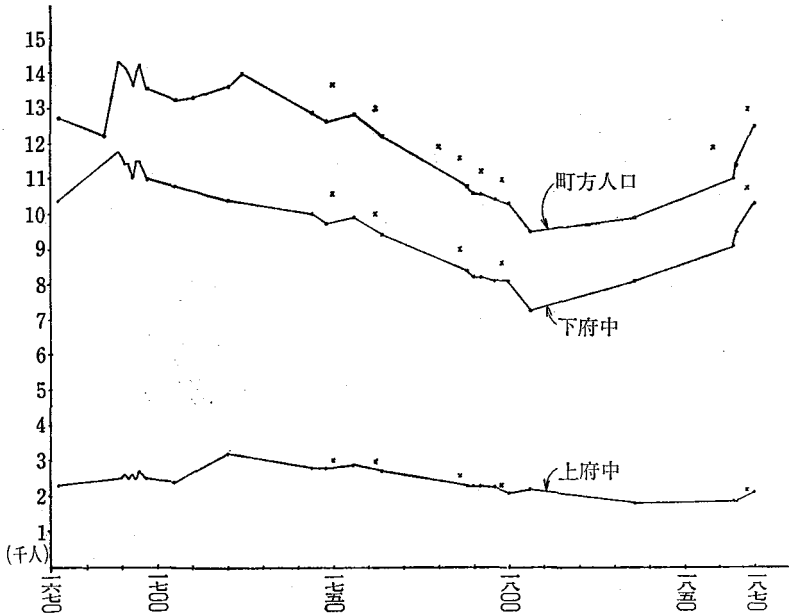
本研究の課題は、まず甲府城下における町方人口の推移構成を概観することであるが、総人口推移のみでなく、町別人口推移を都市プランとの関連で明らかにすることを通じて、都市形成や地域構造の変化を明らかにする一つのアプローチとすることにある。なお人口変動要因と住民の存在形態、人口動態についての検討は別稿<sup>9)</sup>を用意している。

### 一、都市プランと町方人口の推移

甲府城下の市街区は第2図にみるように南北二区に構成されており、北を古府中といい、南を新府中といった。武田氏時代から継承された古府中と異なり、新府中は甲府築城に伴って新らしくつくられた町で、町割は郭内を東西六条、南北四条に区分けして合計十一町を置き、郭外には甲州道中に沿うものと、南側のあわせて八町を置いた。寺院は郭外の市街区の出入口に配置し、元祿年間の古図には甲州道中の東出口に一里塚として土塚を設けて、その上に松を植え背後に惣門台を石組で築いて柵をめぐらしているなど、水系や土居、曲ノ手とともに都市プランの確定をおこなっている。

城郭および市郭の最初の縄張りは、天正末年におこなわれたものようであり、その後市郭の整備がもっとも盛んにおこなわれたのは文祿年中から慶長年間であり、以後城下町の整備が続けられていった。

領主の度重なる交代の中で、宝永二年柳沢吉保が封ぜられ甲府城主になった際、「只今迄古府中と申事相止一同に府中と可申事」という令達を出し、かわって古府中を上府中、新府中を下府中という名称が使われた。享保九年柳沢家が転封になって以後、幕府の直轄領として勤番支配が続いた<sup>10)</sup>。このため侍屋敷の面積比率は、このクラスの城



第1図 甲府城下町の人口推移

×印 2歳以上人口

甲府市役所編(1918) 甲府略誌

甲州文庫史料 第2巻

坂田家文書：御用留，御用日記

より作成

下町規模からすれば三二・八%と少ない。

甲府町方における総人口は、寛文十二年(一六七二)～明治三年(一八七〇)までの期間にわたって断片的であるが三五カ年分が判明している。史料は宗門改帳、人別改帳の集計によるものであるが、宗門改帳は宝永以後五歳以上の記載<sup>12)</sup>であり、人別改帳は二歳以上の記載となっており、どちらの史料か記載のないものもあるが、二歳以上と明記してあるものを除いて人口推移をグラフ化したものが第1図である。

総人口の推移は元禄期の一四〇〇〇人台をピークとして、停滞・漸減の傾向にあり、十八世紀後半からは

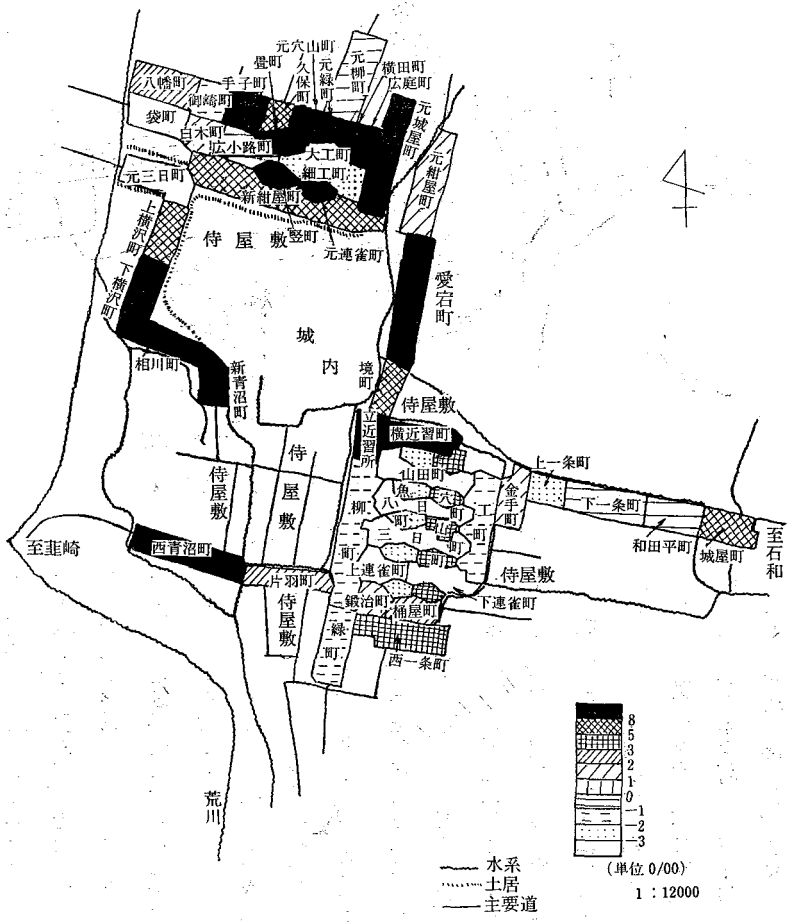
急激な減少をみせはじめ、文化三年の九五六六人を最低とする。しかし、この数字は享和三年の下府中の大火<sup>13)</sup>による影響と思われ、減少傾向は一万人を割ったところで以後停滞し、幕末期に再び急増して一三〇〇〇人前後と十八世紀中頃の水準にまで回復してきている。

下府中・上府中別の人口推移をみると、下府中が城下の中心であり、総人口推移も下府中の動向に左右されている。元禄期の約一二〇〇〇人がピークである。しかし、上府中は享保期の三二〇〇〇人位をピークに漸減している。男女人口割合はそれほど顕著な差はないが、元禄期までは女子人口が五〇〇〇人余多かった。

甲府城下町の動向を総人口推移から五つの時期に区分する。Ⅰ建設・整備期（寛永位まで）Ⅱ発展期（享保まで）Ⅲ停滞期（寛延まで）Ⅳ衰退期（天保まで）Ⅴ再生期（天保以降）それぞれの時期における町別人口の動向を検討したいが、史料の都合でⅡ発展期（寛文十二年～享保五年）Ⅲ、Ⅳ停滞・衰退期（享保五年～天保七年）Ⅴ再生期（天保七年～明治三年）の三つの期間における町別人口動向と都市構造を検討していきたい。また、停滞・衰退期は享保五年～寛政十年と寛政十年～天保七年の前後期に分けて検討した。

## 二、発展期における都市構造

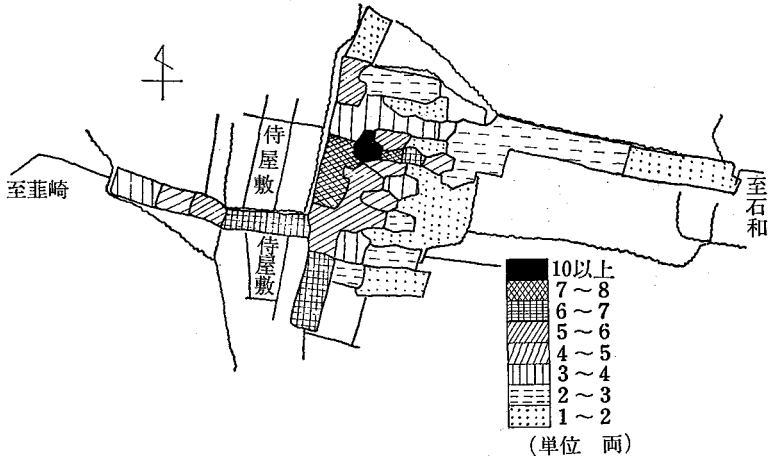
寛文十二年（一六七二）から享保五年（一七二〇）までの四十八年間における総人口は八九〇人の増加で、その増加率は六・九七％で年平均増加率は一・四五％である。町別に示したものが第2図であるが郭外において増加率の高い町が多い。街道筋の東はずれの城屋町（七・四五％）、西のはずれ西青沼町（一〇・一三％）、上府中では全体の年平均増加率七・五六％と多くの町で増加を示し、郭内では北のはずれにある立近習町（三三・二七％）、横近習町（一



第2図 寛文12~享保5年 町別年平均増加率

甲府市役所編(1918)甲府略志甲州文庫史料第2巻より作成

三・九八%)において特に高い。しかし、郭内の中心部ではすでに減少を示しており、東西方向街区を形成している伊勢町(山田町)のマイナス七・三三%を最高に、三日町(マイナス四・八%)、八日町(マイナス三・五八%)上下連雀町(マイナス二・七九%)が目立つ。この時期は、城下町建設



第3図 元禄5年下府中間口1間あたり値段

坂田家文書 元禄5年御用留による

・整備期に古府中から草分けの町人たちが移り住んだ中心商業地から、郭外町、上府中での人口増加が進んでおり、さらに町統地の形成がおこなわれた。そして郭内では、すでに人口の空洞化現象が進んでいるといつてよいだろう。

町別人口推移から城下町の中心から周辺への拡大の様子を知ることができたが、次にその内部構造を借屋率と屋敷値段から考察しておく。元禄五年の小間口一間あたりの丁別値段を示したのが第3図である。屋敷値段からみると、城下町の中心部は八日町一丁目ということになり十一〜二両と最高を示す。次に八日町二・三丁目と柳町二・三丁目が七〜八両となり中心街区を形成し、その周辺は値段が下がるが北部の立近習町、西部の片羽町、南部の川尻(緑)町で再びあがっているのが注目され、郭内と郭外の接触点における町が繁栄していることが推察され、建設・整備以後の都市構造の大きな変化といつてよいだろう。侍屋敷に接する西の街道筋が高く、東側では安く、特に郭内においても魚町一・五丁目、穴山町や東南に位置する丁は最も安い場所であった。また、上府中は一両以下であった。そ

れに関連して、延宝三年（一六七五）における本屋借屋率を表1でみると、通りに面した表借屋と解釈される本屋借屋率は、下府中で二〇・八%、上府中で一一・二%、全体で一七・四%である。町別にみると魚町の四八・五%、西一条町の四三・三%が目立ち、下府中では工・鍛冶・桶屋町の職人町を除いて中心部からはずれた屋敷値段の安い所で高い率を示している。ちなみに享保九年の借屋率<sup>(16)</sup>は全体で三五・三%、下府中四二・二%、上府中一一・六%であり、下府中における裏借屋層の存在を指摘できる。

城下町建設当時から中心街区は

一、太物売買仕候見せ店之儀へ、古来々八日町柳町ニ相極リ申候。他町々出見せ仕太物売買仕候者へ、仲間吟味仕候而指障無之候者へ、仲間江指加江候定ニ致来リ申候御事<sup>(16)</sup>

というように商業上の特権が与えられ、その他にも柳町一・二・三丁目、三日町一丁目の穀問屋、伊勢（山田）町の綿問屋などの特権商人が存在したが、城下町の拡大と共に新興町人層の台頭を生み新たな中心街区を形成しつつあったといえよう。

### 三、停滞衰退期の都市構造

享保五年（一七二〇）から天保七年（一八三六）までの一一六年間の総人口は、三七一六人の減少を示し、増加率はマイナス二七・二%で年平均増加率はマイナス二・三四%である。天保七年は「騒動ニ而人別減候年」であったが、武家人口を含めた城下町人口の全体を知ることができる。町方人口九九四六六人に對して

「右之外、一蓮寺地内、光沢寺地内町並町統遠光寺町、飯田新町、板垣、此人數右凡式千五百人計、御武家御勤番方御家人衆、

$\frac{D}{C} \times 100$ (%)	項目	A 延宝3年 本屋(軒)	B 内本屋 借屋	$\frac{B}{A} \times 100$ (%)	E 天保7年屋 敷数(軒)	F 内明屋敷	$\frac{F}{E} \times 100$ (%)
	町名						
2.7	愛宕町	54	8	14.8	60	11	18.3
1.6	元紺屋町	22	1	4.5	20	9	45
3.5	元城屋町	51	9	17.6	52	15	28.8
5.6	元連雀町	6	1	16.7	7	2	28.6
11.1	新紺屋町	40	7	17.5	44	9	20.5
8.5	細工町	48	4	8.3	48	20	41.7
4.8	大工町	9	3	33.3	9	4	44.4
10.1	広庭町	11	1	9.1	10	0	0
8.4	横田町	11	1	9.1	11	2	18.2
13.2	元穴山町	17	3	17.6	16	4	25
4.2	久保町	28	3	10.7	26	12	46.2
12.2	元緑町	12	0	0	8	3	37.5
12.4	元柳町	53	0	0	54	32	59.3
11.4	手子町	12	1	8.3	11	5	45.5
9.7	八幡町	19	0	0	20	13	65
8.6	御崎町	12	4	33.3	11	8	72.7
18.7	広小路町	34	0	0	35	13	37.1
8.1	畳町	8	0	0	8	0	0
11.8	竪町	16	2	12.5	35	1	2.9
5.4	白木町	23	0	0	24	7	29.2
4.5	袋町	27	0	0	30	14	46.7
2.8	元三日町	49	1	2.0	47	24	51.1
9.8	上横沢町	28	8	28.6	51	22	43.1
	下横沢町	25	6	24			
	相川町	34	12	35.3	33	16	48.5
7.3	新青沼町	49	3	6.1	59	11	18.6
	◎上府中計	698	78	11.2	720	257	35.7

山梨県立図書館所蔵：延宝3年 上下町中家数覚  
 甲州文庫史料2巻所収：天保7年 甲府上下町屋敷数人別改覚  
 山梨県立図書館所蔵：天保8年 極々困窮之者名前人数調帳より作成



表1 延宝3年借屋率・天保7年上府中明屋率・天保8年下府中極々困窮者割合

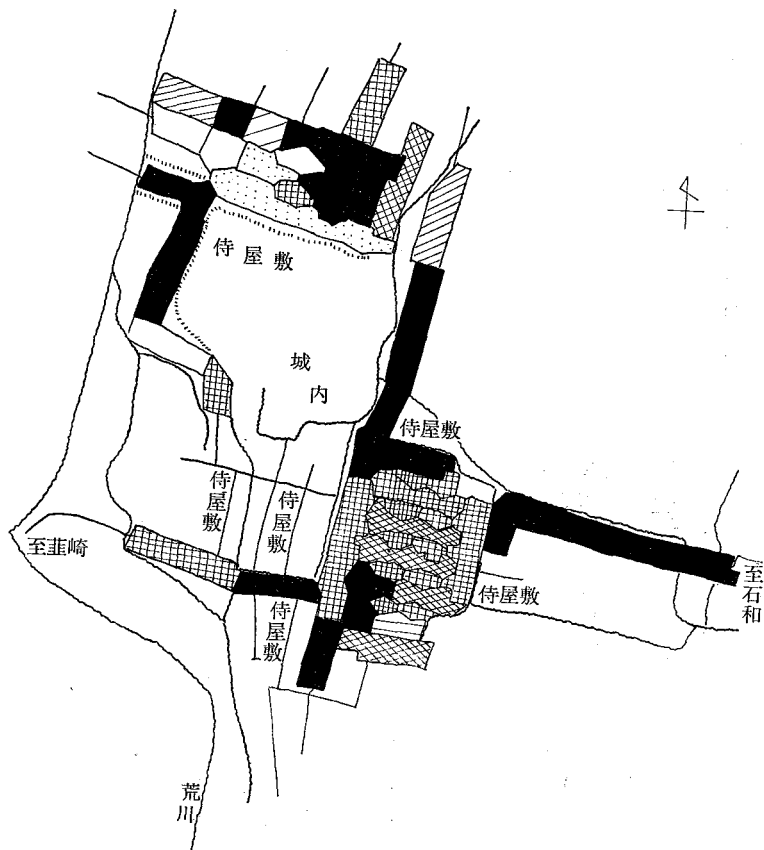
項目 町名	A 延宝3年 本屋(軒)	B 内本屋 借屋	$\frac{B}{A} \times 100$ (%)	天保7年 屋敷数 (軒)	C 天保7年 人口	天保8年 困窮者 家数	D 天保8年困 窮者人数
柳町	86	16	18.6	101	780	10	21
八日町	69	18	26.1	61	374	2	6
三日町	82	28	34.1	83	483	6	17
魚町	68	33	48.5	67	303	9	17
穴山町	74	16	21.6	76	424	16	47
工町	85	1	1.2	94	434	12	37
山田町	58	13	22.4	59	395	6	19
横近習町	52	15	28.8	51	427	20	43
立近習町	32	3	9.4	34	263	7	22
境町	31	7	22.6	29	167	10	22
上連雀町	35	0	0	34	259	5	11
下連雀町	64	18	28.1	60	327	27	40
鍛冶町	33	1	3.0	27	145	4	18
桶屋町	58	0	0	44	308	17	35
金手町	36	9	25.0	47	288	11	28
上一条町	53	11	20.8	60	337	13	29
下一条町	43	4	9.3	53	209	16	39
和田平町	55	13	23.6	44	222	7	18
城屋町	35	12	34.3	55	229	9	27
西青沼町	60	10	16.7	81	654	12	35
片羽町	42	6	14.3	32	224	3	10
緑町	47	0	0	50	428	3	12
西一条町	67	29	43.3	65	447	17	44
光沢寺地内町						26	53
一蓮寺地内町						8	30
①下府中計	1,265	263	20.8	1,307	8,127	276	680
①+②	1,963	341	17.4	2,027			

与力衆、御同心衆、御小人此人数合凡三千人計、兩御役宅、長禪寺前陣屋、合凡人数五百人計、其外人別之者、惣合甲府申人別凡貳万人計と申事也」(17)

と記されており、宗門改に記載される町方人口は全体の半分位であった。

町別の動向をみると、停滞期から衰退期の前半にあたる十八世紀においては、下府中の西一条町と上府中の新紺屋町において人口増加がみられるだけで、他の全ての町で減少している。人口増加地域は町統地であることが推定される。宝暦年間には、穀物の株仲間の特権が侵害されはじめ、寛政年間には町統地にあたる上飯田新町のものが、逸見筋からくる穀物の直買をし嚴重に処罰されている(18)ことや、南に位置する一蓮寺地内町からは、この時期に油屋仲間(19)や質屋仲間(20)に顔を出すものが存在していることからもうらづけられる。城下町は在方での農民の商人化、町方では株仲間統制下に入らない出買商人によって株間の商品流通がうちこわされ町中が困窮するにいたった(21)。城下町人口の減少の町別動向を検討すると、発展期における空洞化現象が進み、郭内町全体に波及して減少が著しい。続く天保までの衰退期後期になると、それまで人口減少の著しかった町は停滞の傾向をみせ、人口減少は、特に街道筋の東側にあたる金手町から城屋町の郭外町や上府中において著しくなっている。次の再生期の徴候として、上連雀町や立近習町、片羽町などにおいて人口増加がみられる。

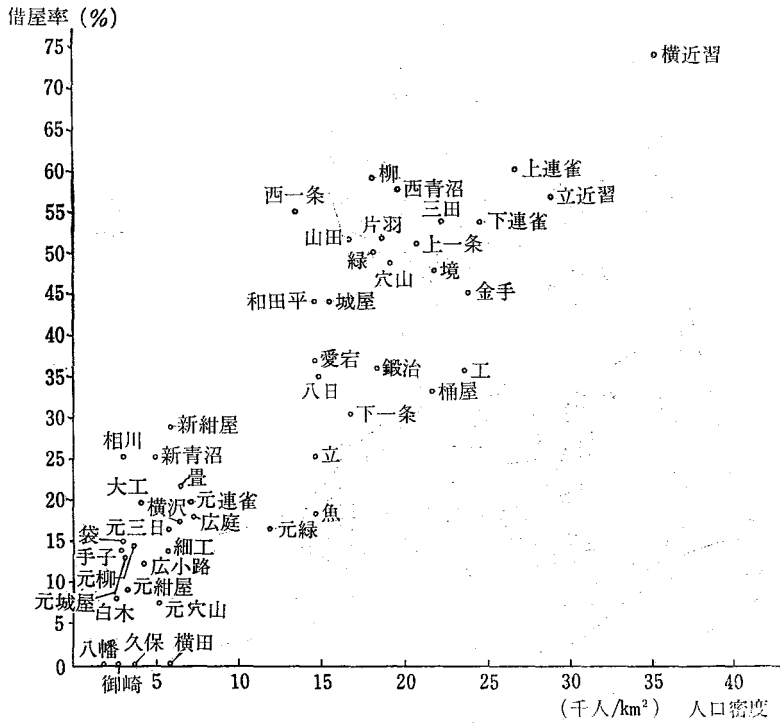
城下町衰退の反映として、上府中では天保七年において明屋率(表1)が三五・七%におよび、閑散とした様子がかがわれ、下府中については天保八年の町別極々困窮者割合を表1でみると、職人町、場末的な町や町統地、そして南北に分散的街区をもつ魚町、穴山町において割合が高く、中心商業街区では低く、元禄五年の屋敷値段分布とはほぼ一致した分布を示すといえる。山田町のように「家持之内ニモ七分通り貸家ニ相成」(22)状態となり、材木町といわれ



第4図 天保7～明治3年 町別年平均増加率

甲州文庫史料 第2巻 明治3年 甲府町方家数人数取調書より作成

(凡例は第2図に同じ)



第5図 明治3年甲府城下町における借屋率と人口密度

山梨県立図書館所蔵 明治3年 甲府町方家数人数取調書

同 年 甲府町坪数凡調書 より作成

た立近習町の家持も「追々余業に移り替」<sup>(23)</sup>るようになっていた。

#### 四、再生期の都市構造

天保七年（一八三六）から明治三年（一八七〇）までの三十四年間で総人口は二五八四人増加しており、年平均増加率八・〇一%であった。下府中が二七・二%と上府中の一七・六%を上まわり、数の上でも下府中中心に再び城下町人口の増加がみられた時期である。第4図によって町別に人口増加率の動向をみると、下府中では桶屋町を除いて増加に転じており、上府中では一部に急増地域がみられるが、それらは人口のきわ

めて少ないところである<sup>(24)</sup>。下府中においては上連雀、片羽、緑町の部分と立近習、横近習町、それに金手町から東の街道筋の町で高い増加率を示しており、郭内外の出入口にあたる部分であるのが特徴である。人口増加率からみれば、城下町は内部分化を伴いながらも再び人口増加に転じたことが確認される。

この時期の都市構造を第5図明治三年の人口密度と借屋率で検討すると、下府中の人口密度は一平方キロあたり二万人程となる。特に高いのは横近習町（三五〇七〇人/km<sup>2</sup>）立近習町（二八八四〇人/km<sup>2</sup>）上連雀町（二六九三〇人/km<sup>2</sup>）で、ついで下連雀、三日町や職人町が高くなっている。人口増加の著しかった町と一致する。借屋率は全体で四六%、下府中では五〇・六%、上府中が二一・七%である。享保九年に比べれば一〇%程の上昇を示している。その分布も人口密度とほぼ一致するものの職人町では相対的に低く、そして町境地である光沢寺地内町が七一・五%と高い点が注目される。横近習・立近習・上連雀町は共に借屋率・人口密度とも高く、幕末に人口増加が著しかった。三日町・下連雀町がそれにつづくものであった。逆に魚町は人口密度・借屋率とも低く、郭内にありながら空洞化している状態であった。延宝三年の本屋借屋率の町別分布とはかなり異なっており、再生期における人口増加は借屋率の増加によるものであり、上連雀町は天保八年の極々困窮者割合が低く、この時期に人口急増、高い借屋率、高い人口密度と最も活気のある町であったことがうかがわれる。しかし、明治三年の極困窮の者取調<sup>(25)</sup>によれば、全体で六五〇八人が極困窮の者とされ、総人口の半数をこえる数であり大量の下層民の存在を指摘しておかなければならぬ。

## まとめ

甲府城下町における町方の人口推移は五つの時期に区分できる。史料の都合から三つの期間について、人口増減の地域変動と都市プラン、都市形成や都市構造との関連について若干の考察をおこなった。

I 建設・整備期 古府中から草分け町人の移動を中心に、新府中の建設がおこなわれ都市プランから部内町、郭外町の区分をおこない城下町の地域的確定をおこなった。寛永期位までに城下町の整備がおこなわれ、郭内における人口集中と郭外への拡大が進んだ。

II 発展期 寛文から享保にかけて、人口増加は郭外町において顕著にみられ、上府中では人口流出から流入がおこなわれ、街道筋に新町あるいは寺地内町の形成が町統地にみられる。都市構造の面では、屋敷値段の分布や本屋借屋率から新興町人層を中心に新たな中心街区を形成しつつある。

III 停滞期 IV 衰退期前期、享保から寛政にかけては人口の停滞から十八世紀後半急激な減少をみせている。ほとんどの町で減少すると共に、特に郭内町全体に空洞化現象が波及している。人口増加は町統地で進んだものと思われ、商業地域としての力をつけていった。

V 衰退期後期 寛政から天保にかけて人口減少はさらに周辺に移動し、郭外町、上府中において顕著にみられ、上府中では明屋が多く閑散とした状態を示し、下府中でも困窮人の増加と共に町別の発展格差を示している。

V 再生期 天保から明治にかけて町方人口は再び増加しはじめ、前の時期に減少の著しかった上府中や東側街道筋のみでなく、郭内と郭外町の出入口にあたる地域での人口増加は借屋層を中心におこなわれ、人口密度の高い町が出

現している。

江戸時代を通じて甲府城下町人口の地域変動は、増加も減少も中心から周辺へ波及しており、再生期にみられる増加が明治以降の近代都市への連続性の上でどう位置づけられるかを新たな課題としておきたい。

末筆ながらお世話になった山梨県立図書館の関係各位に厚くお礼申し上げます。

注

- (1) 速永融(一九七六) 日本における人口史研究の現況と問題点(社会経済史学の課題と展望所収 二二三頁)
- (2) 竹内誠(一九七四) 都市細民の増加と打毀しの類発(荒居英次編 日本近世史入門所収 一八八～一九二頁)
- (3) 藤岡謙二郎・矢守一彦・足利健亮(一九七六) 歴史の空間構造 一二六～一二七頁
- (4) 矢守一彦(一九七〇) 彦根城下の人口構成と人口動態について(幕藩社会の地域構造所収 二一二～二四四頁)
- (5) 深井甚三(一九七七) 近世中期の城下町人口動態について——信州上田城下町の場合——東北大日本文化研究所紀要 別巻一四集
- (6) 大阪では「町統在領」富山では「町端」水戸では「町統郷分地」などとよばれているが筆者は町奉行支配下に組みこまれず町方に接続して形成された町場を一般的に「町統地」と呼んでおく。
- (7) 松本四郎(一九七六) 近世後期の都市と民衆(岩波講座 日本歴史近世四所収)
- (8) 矢守一彦は、明治以降の都市人口推移を総人口推移だけでなく城下町時代の「地域制」に即して検討した。矢守一彦(一九七〇) 都市プランの研究 三四九～三六七頁
- (9) 仮題・近世甲府三日町の人口動態
- (10) 山梨県教育委員会(一九六九) 甲府城総合調査報告 六一～七六頁
- (11) 前掲(8) 二九八頁

(12) 山梨県立図書館所蔵 元禄七年の三日町切支丹宗門改帳のように二歳以上の記載になっている場合もある。

(13) 享和三年柳町二丁目東側庄右衛門の裏借屋から出火、下府中の内十九ヶ町が類焼している。(坂田家文書享和三年御用日記)

(14) 前掲(10)七一〜七二頁

(15) 山梨県立図書館所蔵 享保九年甲府御城下御伝馬町附による。

(16) 寛延三年 太物仲間之儀書付(甲州文庫史料三卷所収)

(17) 天保七年 甲府上下町屋敷数入別改覚(甲州文庫史料二卷所収)

(18) 安藤精一(一九六二) 近世甲府の株仲間 経済理論六七 三〜四頁

(19) 寛延三年 油屋仲間書上(甲州文庫史料三卷所収)

(20) 明和五年 質屋仲間書上(甲州文庫史料三卷所収)

(21) 前掲(18)四頁

(22) 嘉永五年 乍恐以書付奉歎願候(甲州文庫史料三卷所収)

(23) 安政二年 乍恐以書付奉願上候(甲州文庫史料三卷所収)

(24) 慶応四年 御用日記によれば、上府中においては屋敷数七三五に対して竈数五三九で以前閑散としており、下府中では屋敷数一三八二に対して竈数二五九九である。

(25) 坂田家文書 明治三年御用日記